ＩＴＰ－ＡＡ派遣報告書

報告者：丹羽裕美
派遣先：韓国外国語大学校(韓国)
派遣期間：2012年　7月11日～2012年　10月31日(4か月)
派遣先指導教員：Prof. Jae-Wook Kim

留学の概要

今回の派遣の第一目的は韓国内で韓国語を、外国語として学んでいる学習者の修得過程と教育現場の現状を研究することであった。事前に韓国外国語大学校では独自のマスメディア教材によりコミュニケーション能力を養う授業を展開しているという情報を得ていたため、その教育現場を体験し、カリキュラムや教授法を知ることに重点をおいて活動した。韓国外国語大学校　大学院の韓国語教育学部、金チェウク教授の指導を受けながら研究目的を遂行するため現地で行われている直接法による外国語教育の方法を２つの観点から概観し自ら体験することができた。

まず１つ目は韓国語非母語話者のための韓国語教育である。そして２つ目は在韓外国人児童や韓国語は母語であるが両親の一方が外国人というような外国につながる子どもたちへの韓国語教育である。これを多文化教育といい、韓国でも多文化教育の早急な対応が社会的な問題として問われているものでもある。

それ以外に金チェウク教授の授業を聴講する機会や 8 月には「国際韓国語教育学会」、10 月にはソウル大学国語教育研究所主催の国際学会へ出席し、より有意義な留学生活を送ることができた。

留学の成果

①韓国語非母語話者のための韓国語教育

韓国語文化教育院では、1 日 4 時間の授業を週 4 日、担当講師は 2 名で行われた。1 人が、文法、慣用句と討論を、もう 1 人がニュースや映画など動画をつかった聞き取りと作文指導を担当した。

1 日目 1 限では「ほめ」や「謙遜」といった意味のカテゴリーにわけ表現の制約や微妙なニュアンスの差異について学んだ後、数人のグループに分かれてその表現を使った会話文を作り、発表するという形式の授業を行った。2 限目にはニュース映画などの動画を使用した授業であるが独自のマスメディア教材を使用しており私が最も注目した部分である。具体的には 1 限で習った文法内容の一部が、ニュース映画内の会話や内容に含まれているものを選択し上手く取り込まれている。習った文法や表現を動画によって実際の使用状況とともに確認することでその語を学習者がより具体的に理解できるといった映像を使用した効果的な語彙教育の方法を学ぶことができた。

さらに聞きとり授業の内容をより深めるために作文が宿題になる。2 日目はそれに関連した題材で討論をする。このように授業を進めていくことで討論では活発な意見交換ができるだけでなく他の人の発表や意見を聞くことで自分の持つ語彙力を超えた豊かな表現を学ぶことができた。これら韓国語文化教育院で体験したことは今後の研究においてもおおいに役立つと思われる。

②多文化教育プログラム

この韓国語教育プログラムは初級・中級・高級に分かれている。その中で今回は中級と高級の授業の進め方を見てみた。授業方法はインターネットを使用した通信講座でマンツーマンの授業形式である。教師は韓国外国語大学校韓国語教育学科の大学院生が教育を受けたのち行っている。

授業の進め方は表のとおりである。1コマ40分の授業を「導入」10分「展開」25分「整理」5分と3つの段階に区分し、その学習要素は「問題認識」「問題解決」「整理」となっている。それぞれ教師の役割を示してありどの教師が担当しても質の確保された授業がおこなわれるよう標準化されている。

では例えば「説明すること」の授業の学習内容を見てみる。ここでは説明文とは何か。どのような特徴があるか。説明文を上手く書くためにどうしたらいいか。（起承転結）について指導をうける。そればかりでなく「客観的、主観的」とは何か。「概要」とは何かといった語彙の説明も受ける。ここまでは中級、高級ともに同じであり文章内の量や内容に差がある。具体的にテキストの例をみてみる。中級の場合はその物の模様を正確に表現できるように練習をする。高級の場合は問題をどのように解決するか自分の意見を述べる練習や例を読みながら段落ごとの概要を掴んで説明できるように練習をする。

このような語学練習を重ねることによって語彙がより豊富になってくる修得過程を実際にみることができた。

このプラグラムはＬＧという韓国の財閥が資金を提供し韓国外国語大学校が開発した韓国語教育のプログラムである。学生と教師が１対１で行い顔を見て授業ができるシステムを開発した。因みに無料でこの教育をうけることができるという。

今回の派遣で直接、多文化教育を行っている様子を実際に見たり教材やカリキュラムを知る機会を得ることができたが、この方法を非母語話者の韓国語教育に応用活用できる部分がありそうだと考える。

今後の課題

これら 2 つの観点から韓国語教育を実際に見て学ぶことができたことは今後の語学教育の研究に大いに活用できるものであると考える。修士論文では副詞の語彙教育方案を提案したいと考えているが、それにとどまらず、韓国語研究会などでも積極的に発表し今後は韓国語教育学の理論的土台を構築していきたいと考えている。